日本の伝統・文化を継承する若者たち

明日への扉

Door to Tomorrow

Kano Nakamura

1980年山口県生まれ。美術系の短大に進学し、一度は別の職を選ぶが、25歳で重要無形文化財保持者（人間国宝）の故・江里佐代子氏に師事。以来、京都市内の工房で師の思いや技を受け継ぎ、後世に截金の素晴らしさを伝えるため研鑽の日々を送っている。

截金（きりかね）

細く切った金箔などを貼り、さまざまな紋様を表現する技法。技術の習得が困難なことや仏教美術の衰退などから江戸時代以降はごく少数の職人にのみ伝承されてきた。

日本の伝統・文化を継承する若者たちを紹介する

映像ドキュメンタリー「明日への扉」をぜひご覧ください。

MOVIE WebやTVなどでお楽しみいただけます。

Web版

パソコンやタブレットでご覧になれます。 アットホーム明日への扉 検索

TV番組

ディスカバリーチャンネル（CS）

冠番組

「アットホーム presents 明日への扉」放映中

毎週金曜日 22:53~23:00

ビジョン

ANA国際線「SKY CHANNEL」にて放映中

NEW!! 最新号のご案内 好評公開中

No.053／伊勢型紙職人　那須 恵子 氏

途絶えかけた技を継ぎ、仏像に輝きを織りなす。

截金師 中村華乃氏

仏像といえば、全身に金箔をまとった姿が思い出されるが、同じ金箔を身に着けながら異なる趣を放つ仏像がある。木肌や彩色の上に施された、緻密な紋様が織りなす輝き。それは截金の技が生み出すもの。仏教の伝来とともに伝えられ、平安時代に隆盛を極めた截金。しかし、技術の習得が困難なために江戸時代以降、継承者が限られており、技術の存続が危ぶまれていた。

古都・京都で修業を積む中村華乃さんは、その技の伝承にいそしむ若き職人。仏師の父を持つことから截金を見る機会に恵まれ、憧れを抱くものの、一度は別の道を歩んだ。しかし夢を捨て切れず、20代半ばで人間国宝の故・江里佐代子氏に弟子入りした。

きっかけは？

中村「中学生のとき師匠の図録を父に見せてもらい『どうしたらこんな素晴らしい作品を生み出すことができるのだろうか』と強い感銘を受け、截金に憧れるようになりました」

今は亡き師匠から学んだ技を高めるべく、新たに挑むのは火災で失われた聖徳太子像の復元。その工程は彩色から始まった。古い資料を基に、現物に極力近づけた色を像に入れた後、いよいよ截金に移る。

薄さ1万分の1ミリの金箔はそのままでは扱いづらいため、数枚を重ね焼いて一枚の金箔にする。これは10年修業し、独立が許された朝にのみ伝授されるという秘伝の技である。中村さんは、わずか2年でその技を師匠から伝授された。

箔焼きを終えると、紋様のズレを熟慮した割付に合わせ、髪の毛程の細さに截り分けた金箔を、2本の筆を巧みに使い一本一本置いていく。人目に付かない場所にまで神経を行き届かせ、最後の一本まで心を込めて筆を動かすと、精巧で厳かな輝きが800年の時空を超えてよみがえった。

この仕事の魅力は？

中村「截金が施された仏様は、普段拝見できない物が多いんです。言い換えればそういった仏像だからこそ、光を失わなかったのかもしれません。その輝きを生み出す技を継承するのは、とても魅力的な仕事だと思います」

風前の灯だった技は、その光に魅せられた若者のたゆまぬ努力で、さらなる未来につながれていく。明日への扉を開け、また一歩、夢に近づく。

※2013年8月取材。掲載内容は取材当時のものです。

MOVIE MORE!! 師匠と過ごした日々を胸に、努力する姿を動画で詳しくご紹介しています。ぜひご覧ください。